

イスラーム神学者の仕事①

筆者にとって、天理教学という学問を考えるうえで最も身近な参照軸はイスラームにおける「神学」かもしれない。今号では、高校世界史の教科書にも名前が登場し、イスラームのなかで最も著名な思想家の一人であるアブー・ハーミド・ガザーリー (Abū Hāmid al-Ghazālī, d. 1111) を取り上げて、彼が論じたイスラーム神学について論じることしたい。

イスラーム神学とはなにか

イスラームにおける学問の捉え方はスンナ派とシーア派で異なる。しかし、宗教的知識は「宗教基礎学」(ウスールッディーン) と呼ばれる分野を基盤としている。伝統的には、イスラームにおける法学 (フィクフ)、神学 (カラム)、神秘主義学 (タサウフ) を中心的な構成要素としている。

「イスラーム神学」(Islamic theology) と呼ばれる学問分野は、キリスト教神学との対比のなかで便宜的に翻訳され、名づけられたものである。言い換えれば、キリスト教の各学問分野の布置と対比しながら、結果として「神学」という語で呼び表わされている。「神学」という語に該当するのは、先の「宗教基礎学」(ウスールッディーン) のほか、思弁学 (カラム)、一性論 (タウヒード) などと呼ばれてきた学問である。

ガザーリーが著した『中庸の神学』(al-Iqtisād fi al-i'tiqād) には、以下の4つの章が含まれている。この書を、2023年12月に逝去した中村廣治郎の翻訳に基づきながら確認したい。

第一章 宗教における神学の重要性

第二章 神学はムスリム〔イスラーム教徒〕全部に重要なのではなく、そのなかの特殊な人々にのみ重要であること

第三章 神学は集団的義務であって、個人的義務ではない

第四章 本書で用いる論証の方法⁽¹⁾

ガザーリーにとって、イスラーム神学は、神の使徒であるムハンマドによって啓示された神の言葉を思弁的に考察する学問である。この神の言葉を扱う思弁神学が対象とするものは、「神の本質、神の属性、神の行為、神の使徒〔ムハンマド〕(彼の上に神の祝福と平安あれ!)、および彼の口を通してわれわれに伝えられた神の啓示」である。⁽²⁾ 「カラム」(kalām) という語は「言葉」を意味するが、神学とは、まさに神の言葉を扱う領域であると言える。

神学的議論の重要性

イスラーム神学の目的は、神の存在、属性、そして行為、さらに使徒の真理性などの諸命題の真理性を証明することにある。ガザーリーによれば、人間は自らの本性ゆえに諸命題を証明したいと思うのか、人間的理性に基づいて証明せねばならないと考えるのか、あるいは神から人間への命令ゆえに証明するのは明らかではないという。しかしながら、理性ある者にとっては証明せずにはいられないばかりでなく、信仰的義務でもある。

神学的議論に関して、神についての議論に携わりながら知識を得るほうが良い者もいれば、一方で神学的議論を行うことが本人の信仰に良い結果をもたらさない者もいる。ガザーリーは、

こうした人間の類型を4つに分類した。第一に、神の存在を信じ、ムハンマドの預言者性を真理とみなし、神の言葉の真理性を心に抱きながら、神に奉仕する者がいる。彼らにとっては、神学的議論は非常に有用である。彼らは神に対する信仰心や預言者の真理性をすでに確立しているため、神学的議論に向いていると言える。それに対して、第二に、不信仰者や異端者をはじめとして、無学で知性が弱く、単に教えられたことに従うだけの人間には神学的議論は有効ではない。そうした者たちは強制されることでしか、進む道を見出すことができない。

第三に、真理について聞き信従する一方で、知性や聡明さを有している者のうち、懐疑的な言葉を耳にしたり困難に直面したりすると、信仰に疑問を抱き心を悩ませてしまう者たちがいる。彼らは、弁証法的な言葉を聞くことで心の平安を得るだけの聡明さをもつ者もいれば、逆に新たな困難の扉を開いてしまう者もいる。彼らにとっては、神学的議論は賭けでもある。

第四に、現時点では誤った考えを抱いているが、生来的に知性や聡明さを有しているため、疑問や懐疑を受け入れるだけの心の柔軟さを抱いている者がいる。彼らの誤りを指摘し、論争や派閥間の争いをあおることで、相手の考えを変えさせることはかえって逆効果となる。むしろ、彼らには親切な態度をとることで信条に導くことができる。

ガザーリーは神学的議論の重要性を認めつつも、それが必ずしも有効ではない場合を冷静に見極めていた。ある者が神学的議論を活性化したいと考え、突破口を見出そうとすればするほど、相手との議論の機会は遠のいてしまう。

ただし、イスラーム神学という学問自体は、個人レベルでは義務ではないが、集団的義務、すなわち共同体レベルでは行われなければならないという。重要なことは、神学を通して信仰を確固としたものにするのである。信仰に迷いが生じている者は神学的議論以前の問題であり、まずは自らの疑念を取り払わなければならない。

また、ガザーリーは、イスラーム法学の方がイスラーム神学よりも優先順位が上であると論じる。法学は、実生活で直面するより現実的な問題を扱うためである。この意味では法学はムスリムの信仰生活の基盤であり、預言者ムハンマドの教友たちが相談したり話し合ったりして従事してきた知の探求の根幹でもある。

ガザーリーから見れば、神学という学問分野は神について知るといふ非常に重要な役割を果たす一方で、信仰に迷う者には不要な学問であった。また、神学は確立した信仰をより強固なものにする目的を有した学問である。それゆえ、神学を学ぶことで不確かな信仰を確かなものにする、という考え方は取られていない。

他宗教から学んだ知見を天理教学のさらなる飛躍へ。イスラームからの知見は今後の課題の一つである。

[註]

(1) ガザーリー『中庸の神学—中世イスラームの神学・哲学・神秘主義』(中村廣治郎訳) 平凡社、2013年、107頁。

(2) 同書、108頁。